OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	批判的実在論による経済理論の可能性
Author(s)	葛城, 政明
Citation	大阪外国語大学論集. 2006, 33, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79977
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪外国語大学論集第33号（2005年）

批判的実在論による経済理論の可能性

葛　城　政　明

The possibility of an economic theory based on Critical Realism

KATSURAGI Masaaki

(abstract)

Is the essential condition of any science the existence of regularities which can be analyzed and forecast? Indeed this is the case in celestial mechanics. But it is not true of many economic phenomena, although this fallacy is widely accepted or misconceived by almost all mainstream economists. In the celestial world there is only one mechanism operating: Newtonian mechanics, the relativity theory or whatever. In the terrestrial world, however, the multiplicity of mechanisms behind a single phenomenon is common. Hence, there are no such regularities as seen in astronomy in general except under experimental conditions. This very fact leads us to transcendental realism and the need for research on the nature of the socio-economic reality. From this point of view, such rationality as is assumed in microeconomics as the foundation of any economic theory, must be denied, and the result of the denial can be a key to develop a theory of economy as emergent mechanisms in open systems.

はじめに
天体の力学と経済学
道具主義から実在論へ
経済現象と批判的実在論
創発する「構造とメカニズム」としての経済
結論

はじめに

20世紀後半の経済学の特徴は，理論の数学体系化と統計理論を用いた何千本もの方程式からなるコンピューターシミュレーションによる予測にあったといえよう。これによって，経済学は「科学的」体裁を整えたのであった。ところがこの「科学」としての精緻化とは裏腹に，ケインズ革命とそれを受けたクラインによる数本の方程式による計量モデルと比べて，予測能力という点では大幅な進歩は見られなかったのである。そこで，「構造」[1]モデルの精緻化から，理論仮説なき，単なる経済変数間の時系列における規則関係が実証レベルではますます探求されることとなったのである[2]。さらに，ケインズ理論をミクロ経済学に基礎付けようという長年の試みは，ケインズ理論を否定してミクロの論理による全体系の一元的メカニズムによる包摂によって終止符が打たれた。この一見の理論的統一性は，しかし，学問全体としての整合性をもたらしはしなかった。それどころか，この学問は今，Lawson（1997）のいうように，その理論と実践，社会観，そして方法論における三つの次元の不整合が慢性的に続いているのである[3]。彼によれば，その問題の根源は，現在の主流派経済学内での理論的対立や，解かれていない問題にあるのではない。その学問としての方法論が経済現象を分析するには不適切なのである。したがって，経済学の対象である経済現象がどのような性質をもったものであるのか，その「存在論」を探求すべきであることを主張したのである。そこで，本論では経済現象の性質がいかなるものであるかを吟味して，批判的実在論からの経済理論を考えるときどのようなことを前提にはじめればよいのかを議論するものである。

天体の力学と主流派経済学

主流派経済学が経済現象をどのようなものと考えて研究しているかを一言で言い表そうとすると様々な異論が噴出するであろう。しかし，1988年度のノーベル記念経済学賞を受賞したAllais（1992）の見解であれば，少なくとも有力な見解の一つであるとみなしてもよかろう。

> 全ての科学に欠くことのできない条件は，分析され予測することのできる規則性の存在である。これは天体の力学における事実である。しかし，これはまた，多くの経済現象においても真理である[4]。

経済現象もまた，天体の運動のごとき規則性が潜んでいるものと考えられているようである。この問題は後で議論する閉鎖系と開放系，および道具主義と実在論を考える上で非常に重要な論点なのでさらに詳細に検討してみよう。

近代科学の黎明は天動説から地動説への転換，そしてそれに続くニュートン力学の成立によって告げられた。この「近代科学の成立」については既に多くの歴史家や科学史家によって詳細に研究されている[5]。古典古代から中世に受け継がれた「天文学」はプトレマイオスによって体系化された天動説[6]であり，これはキリスト教の教義とも整合的であった。

これに対してコペルニクスは，よりよく惑星の運動を説明できるものとして地動説（太陽中心説）[7]を唱えたのは周知の事実である。しかし，その地動説を述べた著書を教会の干渉を受けることなく出版できた理由はそれほど知られていない。それは，友人の神学者オシアンダーの付した序文にある。天界の運動の本当のことなど知る方法がないのであるから，地動説はより正確な計算のために考案された虚構であると書かれていたのである。このオシアンダーの序文は期せずして，現在，科学哲学の対立している立場の一つである道具主義の考え方を表明した先駆けともなっている。しかしこれが本当に「正確な計算手段」になるには，更なるデータの蓄積とそれによるケプラーの三法則の発見，そして，ニュートン力学の成立を待たねばならなかった。幾何学の体裁をとってはいたが，ニュートンに至って数学的体系として完成したのである。そして，この古典力学が「科学」足りえたのは，その理論によって計算されたハリー彗星の1758年の再来の予測が的中したからである[8]。まさにそこにはアレの言う分析され予測することの可能な規則性が存在し，それが観測されたデータに隠れていたのである。しかも，それが数学的な体系として完成されてはじめてその予測に成功したのである。経済現象もまたしかりということは，経済現象を記録したデータにもまた，同様の規則性が隠れており，それを数学体系として完成させることが真理への道ということだろうか。

経済のマクロデータに潜む規則性は，「はじめに」で述べたとおり，構造モデルという形で探求され，やがて，単なる変数間の時系列関係としてさらに研究が継続されたのである。残念ながら，天文学に比するような予測精度を持った規則性は未だに発見されてはいない。しかも，ケプラーやニュートンのころとは桁違いに発達した最新の統計学とコンピュータを駆使してのことである。通常の解釈は，「経済現象には予期できない確率的な変動が大きな影響を与えるのだからやむを得ない」というものかもしれない。しかし，もっと，根本的なところに問題はないのだろうか。

天体の運動という現象と，経済現象を同様に議論できると考えるのは，素人目には無茶な話に見えるが，ヒューム主義者に典型的な事象の規則性を問題とする経験主義の伝統の中では決して突拍子もない話ではない。そもそも人間に与えられているのは経験ないし感覚与件のみである。それを超えて世界の内側へ立ち入ることなど出来ないのであり，学問がなすことはその経験から構成される事象間の規則性を発見することのみである。こう考えれば，天体の位置というデータも，GDPや貿易収支というデータも，感覚与件から構成された一つの事象であるという点で等価であり，学問はそこに規則性を発見しようとするのであるから，「玄人」目にはむしろ自然な話である。そして，ヒュームのころには発達していなかった確率的要因を加味すれば，現代科学として十分と思えるかもしれない。しかし，この議論には大きな誤謬がある。

たとえば，ある鳥が落とした羽が屋根に舞うという事象を考えてみよう。たしかにそれは万有引力の支配下にあるのであるから，りんごと同様，地上に落ちるであろう。しかし，それは決して重力加速度を伴って地上に落ちて来はしない。真空ではないから当然だと言われるかもしれないが，それゆえ，空気力学の支配下にもある。さらに風が強ければ，空

に舞い上がるかもしれない。そして，強い風が吹くかどうかは気象というまた一段別のレベルの大きなシステムの支配下にある。今度はその羽を落とした鳥はどうであろうか。単なる空気力学や気象による風の力を超えて，自在に空を飛ぶのであり，それは長期的には進化というメカニズムの支配下にあり，また飛ぶという運動それ自体は筋肉内での化学反応や脳神経のメカニズムというまったく別のレベルがおのおの関与しているのである。そしてそのどれもが最終的な鳥の飛び方に無視し得ない影響を与えうる。したがって，羽にせよ，飛ぶ鳥の軌跡にせよ，単一の規則性に従うことが万が一にもあったとすれば，それはまた別の驚異的なメカニズムが働いたと考える方が理にかなっている[9]。そうだとすると，屋外の風に舞う羽一つの動きや，飛ぶ鳥の動きが，天体の運動と同様に議論できないことは最初から明白なことであろう。これは羽や鳥の動きが天体よりも単に複雑な単一の規則の支配下にあるからではないことを明記しておこう。問題はその有効性という点で不特定多数のメカニズムの支配下にあるということである。その中には人間やほかの動物がやってきて，持ち去るという可能性も含まれている。そしてこの羽や飛ぶ鳥と天体との違いの議論が説得的であるとするならば，われわれは先に述べた経験主義とは根本的に違う世界のありかたを受容しているのである。つまり，世界は事象間という観測されるレベルで規則性が一般に成り立つとは誰も思っていないのである。

天体の運動は万有引力という単一のメカニズムの支配しか受けていない（あるいはそれ以外のものは無視しうるほど小さい影響しか与えていない）。同じことだが，他の別のメカニズムによる十分大きな力が外部からやってくることもありえない。したがって，未来永劫にわたって（あるいは天体の寿命というスケールにおいて）法則どおりの運動を続けることが保証されているのである。ところが，天体の運動を除けば，地上で生じる大半の事象は，不特定で複数のメカニズムにさらされ続けながらその動きを続けているのである。それゆえ，現実のデータは，単一のメカニズムによる説明と予測を許さないのである。Bhaskar（1975）はこの天体の運動に代表されるような，観測される事象間に一定の規則性があり，予測可能な系を閉鎖系とよび，後者の羽や鳥の動きの例にみられるような，単に観測される事象間には一定の規則性が保持されず，一般に予測の出来ない系を開放系と呼んだ[10]。この用語に倣うならば，天体の運動を解明したように，現に観測された経済データ一般から規則性が読み取れるためには経済が閉鎖系でなければならないのである。少なくともアレは天文学と経済学を対比したときその点に意識的であったようには思えない。そして，大半の経済学者もまた，この問題に正面から取り組んではいないのである。あえて主流派経済学者の試みが成功するかどうかについて論じるならば，それはどれほど現実経済が閉鎖系であるかにかかっているのである。それゆえ，経済現象という存在が，そもそもどんな性質を有した存在であるのかという探求が必要になるのである。

道具主義から実在論へ

道具主義とは主流派経済学のなかば暗黙に合意された科学哲学である。理論はその仮定の現実性ではなく十分に正確な予想をするかどうかによって決まるという考え方[11]や，過

去のデータに最もよく当てはまり，同時に将来を予測できる数量的モデルを得ることこそがマクロ経済学とあらゆる応用経済学の問題であるとする主張[12]等に典型的に見られる方法的立場である。これは科学哲学の教科書を紐解けば，たとえば次のように書いてある。

> 道具主義によれば，理論は観測にかかる現象の予測や組織化のための道具にすぎず，それを世界の真なる記述を目指すものと理解する必要はない。道具主義が設定する科学理論の目的は，「現象の予測および組織化」なのである[13]。

つまり，閉鎖系であれば，道具主義（反実在論）か実在論かを論じれば，道具主義をよしとするのは半ば当然の帰結となる。閉鎖系においては観測される現象は常に規則的なのであるから，観測される現象に規則性さえ見出せば，予測は閉鎖系の定義により可能となり，世界の「真なる記述」は理論の「目的」に対して冗長なものとなる。そして，数学による組織化で事足りるであろう。したがって，天体の運動に法則を発見し理論化した営みを，無条件に科学の典型と解釈すれば，それは紛れもない閉鎖系であるので道具主義が当然となろう。また，オシアンダーの付した序文のような議論も可能になる。つまり，予測さえ正確であれば，本当は天動説なのか地動説なのか，あるいはそれ以外の何かなのかは関係ないのである。閉鎖系が経済現象にも当てはまると考えられるならば，経済学においてもまた道具主義をその方針としても何の不思議もない。しかし開放系であったとすると，道具主義は今度は逆に定義により失敗を運命付けられた立場となる。特殊な条件下を除けば，開放系で観測される現象は予測が可能な規則性を一般には持っていないからである。ここに実在論が要請する「世界の真なる記述」が必要となる理由がある。

ではこの閉鎖系が生じうる特殊な条件下とは何か，この地上の出来事でありながら，天体の運動と同様の事態が現出する条件とは。その一つは実験という人為的な環境である。そしてこれこそが批判的実在論の指摘する実験の第一の意味である。開放系ではさきにも述べたように種々のレベルを異にするメカニズムが複数同時に作用している。実験はその複数の同時に作用しているメカニズムのうち，注目していないものを中立化，ないし無視しうる程度に抑える条件を準備することによって，ある一つのメカニズムのみが観測されるようにするものなのである[14]。ここにはじめて観測される事象の内にメカニズムの直接的な現われを見ることが可能になる。たとえば，宙を舞う羽の例で言えば，真空にすることによって，空気や気象の影響のない閉鎖系を作り出し，重力加速度で落下する現象が何度やっても同じように観測できるようになるのである。このとき，予測可能な規則性が現出する。さらに，この実験という特殊条件下で知られたことを組み合わせて開放系の世界で再び何かをすることができるならば，その実験の条件下で知られたことは実験の条件下になくても存在し作用しているものでなければならない。つまり，実際の現象の中で知覚可能なように直接的に現れていなくとも実験室で得られた構造とメカニズムは存在していなければならない。これが第二の実験の意味であり，超越論的実在論[15]の根拠とされるものである。われわれは，「科学的知識」によって，机上で「静止」しているペンやノートに

も，空を飛ぶ鳥にも，落下現象として観測されいなくとも重力が働いていることを知っている。すなわち，開放系下では直接にある単一のメカニズムが観測されなくともいくつものレベルの違うメカニズムが事象の背後に実在していることを承知しているのである。それゆえ，実験が意味を持つためには，開放系下では直ちに観測できなくとも，隠れたメカニズムや構造の実在を認め，それを探求の対象とする実在論でなければならないのである（つまり，ヒュームに代表される経験主義による科学論，および道具主義は不可能なのである）。

この場合，科学的説明とはどのようなものを指すのであろうか。かつて20世紀中葉から後半にかけて論理実証主義の影響下にあった科学哲学の教科書に標準的に書かれていたのはヘンペル＝オッペンハイムの説明のモデルと呼ばれるものであった。それはまさしく事象の規則性を一般法則として，初期条件および境界条件から観測された現象を演繹するというものであった。例えば，捉えてきたカラスが黒いのは，「全てのカラスは黒い」という「一般法則」から導くことによって，目前のカラスの黒いことが説明されたとするものなのである。教室で帰納法の説明として「全てのカラスが黒い」例を挙げると，通常学生の笑いを呼び，科学的説明の例として挙げれば，きょとんと意味不明の顔をされることが多い。実際これらの説明は真顔ですればするほど，「失笑」か「呆れ」のいずれかを禁じえないものがある。カラスの例は論理学の教科書に多い例だが，Hempel（1942）は車のラジエターが破裂した例を，その前夜の気温等の初期条件と，水が凍ると体積が増えるという普遍仮説（一般法則）の例で説明している。この例であれば「科学的説明」としての違和感があまり感じられないかもしれないが，その本質は「カラスが黒い」例と同じである。事象の規則性としての一般法則によって演繹することがどれほど科学的説明になっているのか否かは，たとえば狂牛病の例を考えてみればよくわかる。新変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）という現象の科学的説明とは，狂牛病（BSE）にかかった牛を食べるとCJDになるという一般法則から演繹することであろうか[16]。それだけでは不十分であることは誰の目にも明らかである。BSEとCJDはその確率的な事象の規則性がどれほど数学モデルとして定式化されても，それで科学的説明が全うされているとは誰も思わないし，実用性という道具主義的観点から見ても実は不十分である。プリオンの構造とその人体への吸収及び脳内での増殖メカニズムが明らかにされてはじめて，科学的説明がされたといえるではないか。同様にカラスの例であればカラスがなぜ黒くなるのかというその化学物質と，発現メカニズム，そして，より長期的には遺伝と進化のなかでどうして黒くなったかを解明することが科学的説明と呼ぶべきものであろう。つまり，科学的説明とは，観測される事象や現象を，その背後に実在する構造とそこに生じているメカニズムによって因果的に説明することなのである[17]。これが批判的実在論の科学とは何かに関する主張であり，またこれにより経済学の方向転換を強く主張しているLawson（1997, 2003）の立場なのである。

経済現象と批判的実在論

道具主義とか実在論は，通常の経済学の議論の中ではまったく馴染みのないものである。したがって，ともすると何が批判され，何が問題であるのかが，主流派経済学の視点から明確ではないかもしれない。あるいは，「主流派経済学」という言葉自体，「主流派経済学のどの理論や学派を指すのか明確でない」と反論が出るかもしれない。理論とは数学モデルを意味し，実証とは統計的な変数間の関係を調べる全ての経済学がここにいう主流派経済学なのである。それ以外に「科学的」な，あるいは「学問として厳密な」経済学はあり得ないのに何を言っているのだと考えてしまうとすれば，まさにその前提を問っているのである。主流派経済学の教育を受けてきた私自身も，初めてこの批判的実在論の経済学批判を聞いたとき，すぐにはその意味が理解できなかった。なぜなら，主流派経済学の理論スタイルは，経済現象の背後に直接には観測されない効用関数と生産関数という「構造」を考え，その最適化による経済主体の相互作用が，市場「メカニズム」によって，現実に観測される経済現象を生じせしめているという形をとっており，批判的実在論の批判が的を射ているようには最初見えなかったのである。しかし，主流派経済学の内容を吟味してみればそれは実在の構造というよりも，厳密に定義され演繹された虚構であることがわかる。それも現象に首尾一貫した規則性を与えるための虚構である。ここで抽象と便宜的な虚構の区別は重要である。抽象とは実在する関係性から，今説明したい現象と関係のないものを一時的に無視することによって取り出したものである。それに対して，虚構はそもそも実在とは無関係に仮定したり，実在にないものを加えたりするものである。道具主義はこれによって目的に好都合な結論を得ようとするものである。さらに重要な相違は，経済学者が基本的に観測される現象を単一のモデルで説明しようとする点にある。これは，観測される現象は単一のメカニズムにしたがっていることを前提としている。まさにこの点が問題なのである。現実的であろうとすればするほど，そしてまた，それを説明するモデルが単一の首尾一貫したものであろうとすればするほど，実在のあり方との違いを埋めるために，虚構の理論仮説を用意しなければ立ちいかなくなるのである。たとえば，一国全体の消費量がどのように決まるかということは，個々人の合理的最適化行動に還元し，そこから合成されるのが常套手段である。しかし，そのままではまだ一国全体にまで集計して規則的な振る舞いを期待するには様々な可能性がありすぎるので，一国にはあたかも代表的消費者という巨人が一人いるかのようなモデルを作成するに至る。そして，この虚構的な一国を代表する「一人」の消費者が何年も先まで合理的に計算して，今期の最適な消費を決定すると仮定するのである。結論は確かに立派な数学的規則性を生み出すものであるから，確率を含みはしても原則的に説明と予測を対称的に行えるモデルである。しかし，これは現実からの抽象であろうか。いうまでもなく虚構である。そして，このようなやり方でも成功するのはこれまで述べたように経済的な現象が閉鎖系である場合のみである。

経済が開放系であるか，閉鎖系であるかということは，先験的に結論の出せる問題ではない。しかし，マクロモデルが不動の法則を未だ発見できていない以上，すくなくとも経

験的には開放系であることが反証されてはいない。逆に経済が閉鎖系であるとして見出された規則性は，破れる続けることで反証され続けている。さらに，通常の経済モデルの仮定とは違って，個人や企業がいかに歴史的時間の中で不可逆的に変化しているかという問題を鑑みれば，過去の説明と未来の予測が対称的に成されうる閉鎖系に経済がなることは，むしろ開放系であることを論証する以上に特別な説明を有する奇跡的事態であろう。だとすると，仮に経済現象が理解されうるとしても，それは，天体の運動のように理解されるよりも，宙を舞う羽の動きを理解するようなものでしかあり得ない。そのままの正確な動きの予測を理論の成功の基準とすることは原理的に無意味である。また確率的現象として理解をしようとすることは，一見科学的であるが，背後の実在する構造への探求を放棄する盲目的立場である。現象の確率的規則モデルによって政策効果の予測をするよりもむしろ，重層的に作用している未知の実在的構造とメカニズムの解明に目を向けるほうが，経済への干渉方法の手立てを考えるためによほど実用的ですらある。道具主義的手法が使えない以上，最初に必要なことは数学モデルとして解の出る恣意的な仮定を考えるよりも，「世界の真なる記述」いかに行うかを考える方が，道具主義的動機に照らしてすら理にかなっていよう。

さらに，自然科学における実験と同等の価値のある観察をいかに得るかということ考えることもまた重要である。これは開放系の議論と独立のものではない。実験と等価な社会探求というものは，単に社会実証実験のような「実地に行う」ということではない。実験の意味は開放系下の複数のメカニズムから，注目しているもののみを閉鎖系の現象として取り出すことにある。その大前提は複数の次元のメカニズムが作用している開放系であるということである。しかし，主流派の理論にはこの視点がない。主流派経済学の非現実性に対する批判への反論として，実験経済学の試みが挙げられる場合が多いが，それは多くの場合，既にあるミクロ経済学の枠組みの中での効用関数に対する修正がなされるに過ぎない。ミクロ経済学の現象は究極的に個々人の効用関数に還元される。その結果，個人を超える，あるいは個人に先立つ社会構造や文化，歴史が捨象されたままなのである。そして，それらが仮に実在するとしても，独立した個人の相互作用の結果生じるものとして説明することがむしろ企てられる。したがって，ミクロ経済学の理論的視野から可能な実験的観察とは，社会の構造とそれによるメカニズムが個人に先んじて存在することを最初から排除して，全てが個人に還元されることを前提になされざるを得ないのである。

個人と社会に関して，批判的実在論はもちろんこのような見解に同意しない。その第一の異論は，主流派経済学の外の社会科学ではむしろ常識に属することであるが，社会とは個人に還元されるものではなく，個人もまた社会に還元されるものではないということである。そして第二の異論は，一部の社会理論家[15]と共通する見解であるが，社会は，生物的基盤をもった人間から「創発」したものと考える点にある。

批判的実在論においては，経験主義の事象と規則性の平板な世界を否定して，レベルを異にしながら複数同時に働いているメカニズムをもつ深みのある世界が見出される。そして，それは階層化されている。自然を例にとると，明らかに区別されるレベルは，物理，

化学，生物学の三種類のメカニズムのレベルである。これらの関係を見てみると，全ての物理現象は，物理現象である前に化学現象である必然はないが，全ての化学現象は同時に物理メカニズムの支配下になければならない。これは，化学現象が，原子構造における物理的メカニズムなしには存立し得ないからである。しかし，同時に，化学のメカニズムが化学のメカニズムである所以は，物理メカニズムに還元してしまうことができないからである。物理法則だけを与えられても，化学法則を導くことは出来ない。同様に，生物現象は，生物現象である前に化学現象でなければならない。また同時に物理現象でもなければならない。したがって，生物現象は化学メカニズムと物理メカニズムの両方の制約を受けている。ところが化学メカニズムと物理メカニズムの関係と同様に，化学現象や物理現象に還元してしまえないからこそ生物現象なのである。さらに，生物現象は，もしこの地球の数十億年の歴史のなかで生じたのであれば，それは化学現象と物理現象しかない世界から生じたのである。このようにより下層のメカニズムから制約はされても還元は出来ない上層のメカニズムが生じることを創発（emergence）と批判的実在論では呼ぶ[19]。

このようにメカニズムのレベルに着目すれば，より高次のレベルはより低次のレベルのメカニズムの制約をうけつつもより低次のメカニズムに還元できない独自のメカニズムを持ち，しかもそれはより低次のメカニズムから創発したメカニズムになっているのである。そしてそれらは，別々の存在としてあるのではなく，例えば先に述べた羽や飛ぶ鳥のように，一つの存在の中にあり，相互に独立に，しかも同時に作用しているのである。

同様に，経済現象は，生物的存在の人間から創発した社会現象のいずれかのレベルに属する現象である。しかし，この生物以上のレベルがどうなっているかについてはまさに社会科学が探求していることなのであり，ここに至って，最も包括的な生物以上のレベルとしての「社会」概念は妥当であるとしても，「経済」概念はどのような位置を占めるのか先験的に直ちに明らかではない。

創発する「構造とメカニズム」としての経済

それでは「経済」の実在する構造とメカニズムどのようなものなのだろうか。もちろんこの問いの中には，「経済」という範疇の妥当性自体も含まれている。先の節で，物理，化学，生物と三つの範疇を持ち出したが，そのそれぞれが実在の一つレベルをなす層であるとは，そのなかでは単一のメカニズムで究極的には説明が出来るという意味である。その意味でこの三層は詳細に吟味すれば三層以上であると思われる。しかし，本論では自然科学の存在論に議論の中心があるのではないのでその詳細には立ち入らない。したがって，問題は生物より上のレベルの層の構造とメカニズムである。いま「科学」という用語を事象の背後に実在するメカニズム（そしてそれを生み出している構造）を探求するものとすると考えているので，「社会科学」とは社会の事象の背後に実在する構造とメカニズムを探求するものとなる[20]。この領域のメカニズムが単一のレベルのものであるか（つまり，一つのメカニズムに包摂されるか）どうか，そしてまたこの生物より上の層では，もはや層構造にならないのかどうか，これらはそれぞれ，人文社会科学の存在論の問題ではあるが，

議論が拡大しすぎるので，ここでは生物より上のメカニズムの層ということと，「経済」という問題のみに集中して考察してみよう。

まず生物より上の層ということで何がわかるであろうか。それは生物以下の層のメカニズムも成り立っているということである。この議論のためには，その生物以下の層の各々のメカニズムとは何かという問題に立ち入らねばならないかもしれないが，少なくとも進化メカニズムが生物以下の側に属するメカニズムであることに異論はなかろう。そしてもし，進化メカニズムで説明の出来る「社会」現象や「経済」現象があったとすると，それは階層化したメカニズムのレベルで定義する限り，生物現象である，あるいは生物としての人間社会の現象である。ちょうどそれは，心臓から送り出される血液が体内を巡る現象は，ポンプのメカニズムという，生物に生じている物理現象であるように。したがって，進化経済学とか進化ゲームというような議論は社会経済に見られる生物メカニズムである。生物の重要な特徴ははさらに，自らの構造を再生産するメカニズムをもっているということである。これは進化メカニズムの一部である。しかし，この点は先にあげた進化メカニズムを用いて社会経済を理解しようとする社会科学から往々にして欠落している視点である。生物にとって，自らの再生産と変異が進化の重要な要件であったことを忘れてはならない。そしてその自らの構造の再生産があるからこそ，単純なそれ以下の物理現象の現れに反するようなことを可能にする構造が存在し続けられるのである[21]。同じことであるが，生物存在は再生産という生物メカニズムが働かなくなったとき，例えば枯れ木が倒壊するように，ただの物理化学メカニズムに従って早晩「崩壊」し消滅する。そして，この生物メカニズムを経済社会も受け継いでいる。ありとあらゆる人間社会特有の存在は，意識的，あるいは無意識的に再生産を続けることによって存在している[22]。建造物等の物質的存在は言うまでもないが，非物質的意味と不可分な，言語も貨幣も，商品も国家も，それが再生産され続けなければ，すなわち，それを再生産する構造とメカニズムをその内部か，それを含むより大きい再生産構造のどこかに持っていなければ，時間の中で意味ある持続性を持った存在とはなり得ない。そして，この非物質的な社会的存在（言語，価値，ルール等）を含むところが，単なる生物以下のメカニズムを越えたところであることはいうまでもなかろう。それはちょうど心臓が血液を送り出すポンプメカニズムは物理現象であるが心臓そのものは生物的存在であるように，自らを再生産する構造それ自体は生物のメカニズムを受け継いでいる。そこには物理現象に対する生物現象の関係のように非物質的構造が新たに創発したものとして不可分に介在し，独自のメカニズムが発生している。

アダム・スミスに遡る経済固有のメカニズムは市場メカニズムであると多くの経済学の教科書に書かれている。市場メカニズムとは，需給が市場において価格の上下によって一致するように調節されるというものである。通常の解説では，超過需要や超過供給があったときにどのように価格が動くかということに「メカニズム」の力点が置かれるが，このメカニズムの成り立ちはもっと大きな構造にある。スミスの国富論を読むと，生産力の爆発的な進歩は分業によるという議論から始まり，交換，貨幣へと節が移るのであるが，注意すべきことはどの経済概念も独立では存立し得ないことである。つまり，交換や貨幣な

くして分業の発展はありえないし，逆に交換の広範な展開も，貨幣の発生も，すべておのおの残りの他の事態を前提とした循環的存立構造を持つ卵と鶏のような関係になっている。そして，市場メカニズムもまた同様の存在の連鎖の中にある。市場メカニズムは発達した分業や貨幣の存在から独立に存立しえず，またそのメカニズムがなければ，発達した分業や貨幣も存在し得ない[23]。つまり，同時に再生産され続けられねばならない連鎖の中にある。ということは，これらは萌芽的形態であれ同時成立的に循環の中に入っていかなければ成立し得なかった。しかし，成立すれば，その存立の前提条件が続く限り，それ以前のメカニズムに還元することが出来ない独自のメカニズムによって存在し続けるものなのである。これこそが，経済社会の創発である。ミクロ経済学によれば，すべての経済社会の根本問題とは，何を，どれだけ，どのように，誰のために生産するかを決定しなければならないことにあるとされる。そしてその決定メカニズムを扱うものが経済理論とされている。主流派の基礎理論であるミクロ経済学は，抽象というよりも虚構の上にこれを「解明」する。その虚構とはあたかも自然的に全ての個人的価値が決定されているという合理性を仮定するものであるが，実際には，遺伝子に消費対象の価値が具体的に書かれているわけではないので，持続的な創発の構造とメカニズムがそこにあるはずである。ここに主流派とは別の実在論的な新たな経済理論の出発点があるのではないだろうか。

結論

主流派経済学が学問的厳密性という形式的装いを超えて成功を収めてはいないとすれば，その理由は，観測される次元での事象の規則性が一般には成り立たない経済現象に対して，閉鎖系を仮定した理論と方法論を適用していたという点に求められる。閉鎖系の科学方法論としては実在論よりも道具主義が支持されるのであるが，開放系では道具主義は無効であり，実在論に基づかなければならない。さらに，開放系で生じている多重的なメカニズムの存在の根本理由を吟味すれば，それは世界がレベルを異にした創発する層をなす構造を持っているということである。したがって，「経済メカニズム」の成立するレベルがあるとすればそれは創発したものなのであり，その構造とメカニズムの探求が批判的実在論の経済理論の内容となるべきものなのである。

参考文献

Allais, Maurice (1992) 'The Economic Science of Today and Global Disequilibrium', in Mario Baldassarri, John McCallum and Robert Mundell (eds) *Global Disequilibrium in the World Economy*, Basingstoke: Macmillan.

Bertalanffy, Ludwig von (1950) 'The Theory of Open Systems in Physics and Biology', *Science*, No. 111, pp. 23－9.

Bhaskar, Roy (1975) A *Realist Theory of Science*, London:Verso Books.

——(1998) *The Possibility of Naturalism, A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences*, 3rd edn, London: Routledge.

Butterfield, Herbert (1948) *The origins of modern science : 1300－1800*, London : Bell and Sons.

Collier, Andrew (1994) *Critical Realism: An Introduction to Roy Bhaskar's Philosophy*, London:Verso.
Copernicus, Nicolaus (1995) *On the Revolutions of Heavenly Spheres*, translated by Charles Glenn Wallis, New York: Prometheus Books.
Friedman, Milton (1953) 'Methodology of Positive Economics', *Essays in Positive Economics*, Chicago: University of Chicago Press.
(佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証経済学の方法と展開』富士書房, 1977年。)
Hempel, Carl G. (1942) "The Function of General Laws in History" *Journal of Philosophy*, vol. 39, pp. 35－48.
Kuhn, Thomas S. (1957) *The Copernican Revolution: Planetary Astronomy in the Development of Western Thought*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Lakatos, Imre (1978) 'Science and Pseudoscience', *The methodology of scientific research programmes Philosophical* Papers, Volume I, Edited by John Worrall and Gregory Currie, Cambridge: Cambridge University Press.
Lawson, T. (1997), *Economics and Reality*, London: Routledge.
――(2003) *Reorienting Economics*, London: Routledge.
Lucas, Robert E. (1986) 'Adaptive Behaviour and Economic Theory', *Journal of Business*, vol. 59, no. 4, 401－26.
――(1987) *Models of business cycles*, New York : B. Blackwell ,.
Ptolemy (1998) *Almagest in Ptolemy's Almagest* translated and annotated by G. J. Toomer, with a foreword by O.Gingerich, Princeton: Princeton University Press.

内井惣七 (1995)『科学哲学入門―科学の方法・科学の目的』Sekaishiso seminar 世界思想社 .
佐和隆光 (1988)『経済学における保守とリベラル』, 岩波書店 .

1 ここで「構造」という言葉を括弧に入れたのは，本論の立場となる実在論とは意味が異なるからである。正統派マクロ経済学や計量分析における「構造」とは現象として観察される単なるマクロ経済変数間の関係を指しているに過ぎない。これに対して，実在論における構造とは必ずしも現象として直接には観測されない，現象を生じせしめている背後の因果的構造のことを意味する。具体的な例で説明すると，水素と酸素が化学反応を起こすのは原子の構造における電子状態が関わっているのであり，このような原子内部における電子軌道や電子の状態と原子核との関係に対して実在論では「構造」という言葉を用いる。これに対して，酸素の気体1単位と水素の気体2単位が反応すると，何単位の水の気体になるかというような数量的関係が，マクロ計量モデルにおける「構造」と呼ばれるものである。この違いは本論においては重要である。
2 このような主流派経済学の総括は，佐和 (1988, pp.206－208.) による。
3 Lawson (1997) の第一章参照。一章全体がこの三つの不整合の検証に割かれている。
4 Allais (1992, p25.) からの引用。日本語訳は葛城による。この Allais の文献の存在は Lawson (2003) で知った。
5 Butterfield (1948) および Kuhn (1957) などがあげられる。
6 Ptolemy (1998) 参照。
7 Copernicus (1995) 参照。
8 ラカトスはさらに，アインシュタインの相対性理論についても，星間距離が昼夜で違うことを予測した例を挙げて，このような予測可能性が科学を似非科学から分かつものと論じている。Lakatos (1978, pp.4 － 7.) を見よ。
9 ノーベル賞受賞経済学者ルーカスは「経済学の強みはその理解しようとしている人々の成り立ちや生活を知ることなしに人間行動を予測できるという浅薄性 (superficiality) にこそある」(Lucas 1986, p.425) と述べている。しかし，この予測が現に成り立たないから経済学はうまくいっていないのであり，そしてそのような人々の成り立ちを超えた単一メカニズムの「奇跡」がもしあると

したら，なぜありうるのかもまた考えだにしていないのである。

10 Bhaskar （1975, pp.13－14.） 参照。この「閉鎖系」および「開放系」定義は必ずしも哲学の文脈で一般的なものではない。また経済学では全く用いられない類の概念である。よりよく知られている定義はたとえば，Von Bertalanffy （1950, p. 23.） の定義見られるようなシステムの外部に対して開かれているか閉じているかというものである。

11 Friedman （1953, p.21.） 参照。

12 Lucas （1987, p.7.） 参照。

13 内井 （1995, p.253.） からの引用。

14 ここに観測の理論負荷性という問題が発生する。内井（1995）は観測の理論負荷性という問題について否定的であるのだが，その根拠は天体を観測した事例について議論しているのである。これはまさしく閉鎖系についてであり，閉鎖系においては確かに内井氏の言うとおり理論負荷性という問題は発生しない。しかし，開放系であれば，あらかじめ世界の真のありかたが分かっていない以上，実験の条件というものは理論的にある単一メカニズムが発現しているはずだというものを観測するためのもの意外ではあり得ない。ここに観測データの理論負荷性が不可避的に生じうる。

15 この「超越論的 transcendental」とは，「あるXということが可能であるためには世界はどのようでなければならないか」という問いに基づいていることを意味している。カントの場合は，「ニュートン力学が可能であるためには世界はどのようのでなければならないか」というのがその超越論的観念論の出発点であった。Bhaskar（1975）は，「実験室で知られたことが実験室の外の世界でも有効であるためには世界はどのようでなければならないか」という問いを立て，道具主義や経験論では認めない，現象の背後の構造とメカニズムの実在を主張するに至ったのである。これを超越論的実在論と呼ぶ。さらに Bahskar（1998）は，自然科学と同じ方法が社会科学においても可能かどうかという「自然主義 naturalism」の可能性を吟味して，「批判的自然主義 critical naturalism」を主張するのであるが，この二つの考え方からなる（社会）科学の哲学と方法が「批判的実在論 critical realism」と，その考え方を支持する人たち（T. Lawson, A. Collier, M. Archer, etc）によって呼ばれ，英語圏，および北欧にその呼び名が広がっている。

16 この狂牛病の例は Lawson （1997, p22.） の例をさらに敷衍したものである。

17 恐ろしく当たり前のことを述べているようにみえるとしたら，科学哲学の教科書，あるいは日本中どこの大学生協へ行っても積んである主流派経済学の教科書を開いて見られることを薦める。このような説明は皆無である。

18 たとえば，Luhmann（1987）があげられる。

19 この説明は葛城の理解するところである。Bhaskar（1975, p.113.），Lawson（2003, p.43.）および Collier （1994, pp.107－134.） 参照。

20 Lawson （2003, p.23.） 参照。

21 ここにいう物理現象に反するとは，たとえば，重力に反して木は上に伸びるとか，水を根から葉に引き上げるような現象を意味する。

22 このような「自己を再生産する構造」は，あまりにも当然過ぎて，議論の対象とはならないと考えられているせいか，少なくとも主流派経済理論のテーマではない。一方，マルクス経済学においては「資本」がまさにそのような自己を再生産する存在として分析されている。

23 もちろん，可能性として，市場メカニズム以外のものを代替することで別な自己再生産システムを考えることは可能であるし，実際，歴史上には存在した。

（2006．1．12 受理）